

水より重大な問題があるのか？

第一特別調査室長

う さ み ま さ ゆ き
宇佐美 正行

表題の問いかけは、昨年10月14日付けの読売新聞に掲載された英国の歴史家ポール・ケネディ氏の論説『地球を読む』から半ば拝借したものである。ケネディ氏は次のように述べる。今から2050年までの間に世界が直面しかねない最悪の事態は何か。中東の核戦争か、米中の覇権争いか、それともロシアの領土拡張の動きか。いずれも違う。それは、無くなるまではあつて当たり前とと思っている存在、つまり「水」だと警鐘を鳴らすのである。水資源の枯渇こそが人類の長期的な安全保障にとって最大の脅威であり、これより重大な問題があれば教えてもらいたいと、我々読者に挑むのである。

この主張を裏付けるように、地球上の水問題は日々深刻化している。そもそも水問題とは何かと煎じ詰めれば、量と質の問題に行き着く。量の問題で言えば、2025年までには、人間が年間一人当たり必要とする水資源量1,700m³を下回る環境で暮らす人の数は30億人を超え、世界全体の水需要量も約1.4倍に膨らみ供給が追い付かない状況に至ると予測されている。また、質の問題では、既に地表水や地下水の汚染が進んでおり、例えば中国の7大水系のうち飲料用の水源として利用できる割合は2割から3割程度に過ぎず、アジアの農村部では砒素や弗素による汚染で多くの健康障害が起きている。

こうした傾向は、特に途上国や新興国を中心に、急速な経済成長や都市化、人口の急増を背景に強まっているが、近年ではインフラの未整備や異常気象など気候変動リスクにより、2011年のタイの洪水被害で象徴されるように大規模な水災害も頻発し、一国のみならず世界全体にも影響が及ぶ事態となっている。

このため、国連やG8サミット、世界水フォーラムなどの非政府組織は連携を強化し取組を活発化しているが、特に日本は水と衛生分野のODA実績ではトップドナーであり、その貢献が期待されている。日本はモンスーンアジアに属する国の中でいち早く近代化に踏み出し治水事業や水資源開発を進め、この間に大型の上下水道から小規模分散型の合併浄化槽まで多様な水処理手法を蓄積するほか、再生水利用や海水の淡水化、衛星地球観測による水災害の予警報など様々な技術も開発し、これらを基に豊富な支援メニューを持つ。

参議院国際・地球環境・食糧問題に関する調査会は、3年にわたり「世界の水問題と日本の対外戦略」をテーマに調査を行い、2013年5月29日に最終報告書を議決し、議長に提出した。そこでは、こうした日本が誇る水に関する知見、技術及び経験を総合的かつ戦略的に活用し、世界の水問題の解決に貢献し、そして日本の国際社会での存在感を示すことを狙いとして58項目にわたる提言を行っている。折しも今年には国連が定めた「国際水協力年」である。参議院調査会が発信した問題提起が冒頭紹介したケネディ氏の問いかけへの回答の一つとなるよう、今後の諸施策に反映され実現されることを願うばかりである。